

障害のある子や配慮が必要な子の支援に関する保育者の意識と園内体制の現状

北條 香織

I 問題と目的

幼稚園教育要領と保育所保育指針において、個々の幼児の障害の状態等に応じた支援・指導を組織的・計画的に行うことが求められ(文部科学省, 2008a; 厚生労働省, 2008)、特別支援教育に関する体制整備を図ることが重要になっている。

しかし、特別支援教育体制整備状況調査(文部科学省, 2015)では、幼稚園において、個別の指導計画の作成及び個別の教育支援計画の作成の実施率が低い現状にあり、配慮が必要な子の支援に向けた話し合いや情報共有が十分に行われていない(佐久間・田部・高橋, 2011)等の課題が指摘されている。

一方、保育園について、全国保育協議会(2012)の調査では、有効回答数 8,205 施設の 74.8%において配慮が必要な子の障害児保育を実施している現状が報告されている。しかし、保育園における障害のある子や配慮が必要な子の支援(以下、障害児支援)に関する体制整備状況については明らかになっていない。

障害児支援に関する体制づくりにおいて、障害児支援を行う保育者の意識に着目することが重要であると考えられる。これまで保育者の障害児支援に関する意識について、障害のある子の支援を経験することで子ども理解に変化があったこと(池添・高橋・伊藤, 1990)や支援や指導に対する不安・困難(安塚・京林, 2007)等、障害児支援に関する意識を全体的に言及したものであり、構造的に捉えられたものは見当たらない。

高田・中岡・黄(2011)は、教員間で日常的にコミュニケーションをスムーズに行えるような、協働的で支え合える雰囲気作りが、障害児を安心して担任するためにも重要であると述べている。また、障害児支援を行っていく上での困難について、同じ職場の同僚や園長、主任に相談している現状

が半数以上占めている(吉川・尾崎・細渕, 2008)ことを報告している。以上のことから、すぐに相談できる環境や協働的な雰囲気という職務環境が保育者の障害児支援に対する意識に影響していると考えられる。また、佐藤・岩切(1989)は年齢が若く、保育経験が短い保育者ほど、自分に自信がないため障害児の受け入れに困難を感じていることを明らかにしている。保育者の勤務経験年数及び障害のある子の担任の経験年数(以下、経験年数)の違いが障害児支援に関する意識に関係していると考えられる。さらに、園長が広い視野と幼稚園教育に対する識見に基づいて、リーダーシップを発揮し一人ひとりの教師が生き生きと日々の教育活動に取り組めるような雰囲気をもった幼稚園づくりをすることが求められ(文部科学省, 2008b)、園長の意識も影響すると考えられる。

そこで本研究では、研究1で、障害児支援に関する園内体制の現状と保育者の障害児支援に関する意識及びその関連要因について、研究2で、障害児支援に関する園内体制整備についての園長の考えと園内体制づくりの工夫について明らかにし、障害児支援に関する園内体制づくりのあり方について検討することを目的とする。本研究を実施するにあたり、対象となる幼稚園と保育園の園長と保育者からの研究協力の承諾及び、学内の研究倫理審査委員会の承認(2015-26)を得て実施した。

II 研究1

1 対象と手続き：A県内の公立幼稚園と公立保育園で、調査協力可能と返信があった164園の園長158名(公立幼稚園14名、公立保育園144名)、障害のある子を担任している保育者214名(幼稚園教諭15名、保育士199名)を対象に郵送による質問紙調査を行った。

2 調査項目：園長への質問項目は、フェイスシート、園内体制の実態に関する項目。障害のある

子を担任している保育者への質問項目は、フェイスシート、園内体制の実態、障害児支援に関する意識の項目、障害児支援における職務環境に関する項目。

3 分析の方法：①障害児支援に関する園内体制について単純集計を行う、②保育者の障害児支援に関する意識の構造について明らかにするため、因子分析を行う、③障害児支援における職務環境の構造について明らかにするため、因子分析を行う、④障害児支援において、職務環境が保育者の障害児支援に関する意識に及ぼす影響を明らかにするため、職務環境を独立変数、保育者の障害児支援に関する意識を従属変数として単回帰分析を行う、⑤障害児支援に関する意識と障害のある子を担任している保育者の属性の関係を明らかにするため、障害児支援に関する意識の各因子得点の平均値を保育者の経験年数群ごとに算出し、分散分析を行う。なお、統計処理に統計ソフト「IBM SPSS Statistics 22」を用いた。

4 結果・考察：146園の園長139名と障害のある子を担任している保育者185名から回答が得られ、回答に誤記入や未記入のあったものを除く園長135名、障害のある子を担任している保育者184名を有効回答とした。その結果、園内体制整備状況について、園内委員会、ケース会議等の既存の園内組織の中に機能をもたせ、園長や主任が特別支援教育コーディネーターの役割を兼務しており、園内研修や巡回相談は多くの園で実施されていた。しかし、個別の支援計画の作成率が低いこと、巡回相談員の活用や園内研修の内容についての課題が見られた。今後は、個別の指導計画の活用、個別の支援計画の作成・活用、園内研修の内容の検討が求められると考えられる。

保育者の障害児支援に関する意識は、第1因子「支援の不安・困難」第2因子「支援の振り返りや情報収集による保育改善」第3因子「子どもの実態に関する情報収集と活用」第4因子「子どもの思いや困難さの理解」第5因子「支援に対する主体性」の5因子が抽出された。内的一貫性を検討するため、Cronbachの α 信頼性係数を算出した。

その結果、第1因子.809、第2因子.655、第3因子.693、第4因子.669、第5因子.450であった。第2因子、第3因子、第4因子の信頼性係数はやや低いものの各因子とも内的一貫性が確認されたと判断した。第5因子は、小塩(2004)が述べている.50以上の基準を満たしていない。第5因子については信頼性が確保できなかったため、分析の対象から除外した。分析に用いる各因子項目、負荷量、 α 係数を表1に示す。

保育者の障害児支援における職務環境については、因子分析の結果、第1因子「学び合いや伝え合う雰囲気」の1因子が抽出された。

障害児支援において、職務環境が障害児支援に関する意識にどう影響を及ぼしているかを明らかにするため、職務環境1因子を独立変数、障害のある子や配慮が必要な子の支援に関する意識4因子を従属変数とした単回帰分析を行った。その結果、4因子すべてに有意な差は認められず、障害児支援における職務環境は、障害児支援に関する意識に影響を与えていないことが考えられた。質問項目の平均値±標準偏差が上限値(5.1以上)を超えた項目がほとんどであったことから、今後、障害児支援における職務環境に関する質問項目の検討を行うことが必要であると考えられる。

障害児支援に対する意識の各因子得点の平均値を保育者の経験年数群ごとに算出し、分散分析を行った結果「支援の不安・困難」では、勤務経験年数($F(4, 171) = 3.920, p < .01$)及び障害のある子の担任の経験年数($F(2, 170) = 4.299, p < .05$)による有意な差が認められた。経験年数の低い群が高い群に比べて得点が高く、経験年数の短い保育者は長い保育者に比べて、支援に対する不安・困難を感じていると考えられた。経験年数の短い保育者の支援として高濱(2000)は、特定の指導方法あるいはスキルの教授・訓練だけでは不十分だと述べており、今後、経験年数の長い保育者による経験の短い保育者に対する障害児支援の力量形成支援についての検討が重要であると考えられる。

III 研究2

1 対象と手続き：A県内の障害児保育経験が5

表 1 障害のある子や配慮が必要な子への支援に対する意識の因子分析結果 (主因子法・Promax 回転)

	因子			
	I	II	III	IV
第 1 因子 支援の不安・困難 ($\alpha=.736$)				
22 クラスの中に障害のある子や配慮が必要な子がいる時は、自分の教育(保育)に不安を感じる	.776	-.050	.104	-.040
25 障害のある子や配慮が必要な子の就学時の姿を見通して計画的に支援を行っていくことは難しい	.611	.086	-.202	.123
18 障害のある子や配慮が必要な子の保護者の願いや気持ちを理解するのは難しい	.590	.085	.038	.030
5 今の自分の能力では障害のある子や配慮が必要な子を受け持ち、教育(保育)をする自信がない	.583	.177	-.065	-.261
19 障害のある子や配慮が必要な子の実態について、どのようにしたら保護者と共通理解できるのか悩んでいる	.562	-.173	.128	.154
23 障害のある子や配慮が必要な子を含めた集団教育(保育)は難しい	.533	.153	-.087	.116
17 教育(保育)場面ではどうしても子どものできないところにばかり目がいってしまう	.518	-.143	.084	.082
12 障害のある子や配慮が必要な子一人ひとりがどのような力をつけていったらよいのかを正確に把握することは難しい	.515	-.132	-.127	.112
2 障害のある子や配慮が必要な子に対してどうかかわっていけばよいのか不安がある	.498	-.134	.229	-.139
3 障害のある子や配慮が必要な子の実態把握をどのように行ったらよいか分からない	.446	.057	-.102	-.306
第 2 因子 支援の振り返りや情報収集による保育改善 ($\alpha=.665$)				
24 障害のある子や配慮が必要な子の教育(保育)について、分からないことがあれば、積極的に参考書を読み、子どもへの対応や遊びの内容を考えている	-.005	.654	-.022	.148
20 障害のある子や配慮が必要な子が活動しやすいような教育(保育)内容になるように、日々の記録から振り返りを行い、指導計画の修正を行っている	-.068	.629	.093	-.254
4 障害のある子や配慮が必要な子の教育(保育)を学ぶため、積極的に研修等に参加している	-.036	.505	.066	.059
21 個々の保護者が子育てしていく上での悩みを解決するために、どのような支援を必要としているのか把握できている	-.062	.472	.072	.078
第 3 因子 子どもの実態に関する情報収集と活用 ($\alpha=.652$)				
14 専門機関からの助言を活用し、個に応じた指導や集団教育(保育)の内容を検討している	-.027	.011	.578	.154
16 障害のある子や配慮が必要な子の保護者との連携の仕方について、常に改善を図っている	.048	.081	.569	.000
13 時間がかかっても障害のある子や配慮が必要な子の個々の実態に応じた指導・支援を考えたい	.066	-.017	.462	-.039
15 自分のクラスの活動計画作成のために自分のクラスの子どもに関する情報を他のクラスの保育者や園長から収集している	.075	.284	.446	.062
7 障害のある子や配慮が必要な子の実態に応じた教育(保育)ができるよう、自分の支援の仕方について他の保育者に意見を求めている	-.006	.067	.435	-.029
第 4 因子 子どもの思いや困難さの理解 ($\alpha=.669$)				
9 障害のある子や配慮が必要な子が何に困難さを感じているかわかる	.093	-.025	-.013	.684
10 障害のある子や配慮が必要な子と向き合い、思いを受け止めることができる	.037	.087	.098	.613

年以上でかつ、園長の経験年数 7 年以上の保育者 2 名に半構造化面接を実施した。

2 調査内容：フェイスシート、障害のある子や配慮が必要な子の支援に関する園内体制整備についての考え、障害のある子や配慮が必要な子の支援に関する園内体制づくりの工夫。

3 分析の方法：対象者 2 名の語りを録音し、逐語録化した。その後、定性的コーディング(佐藤, 2008)をもとに、対象者の語りの内容をコーディング(オープンコーディング)し、次にそれらの複数のオープンコードに共通する、より抽象度の高いコーディング(焦点的コーディング)を行い、概念を抽出し、調査内容ごとにまとめた。

以下、本文中では概念名を【 】, オープンコードを< >で示す。

4 結果・考察：園内体制整備の考えについて、36 のオープンコードとそれらの組み合わせからなる 13 の概念が抽出された(表 2)。【園長の主体

性】を發揮し、<自分からなるべくコミュニケーションをとる>等を行い<保育者が話しやすい雰囲気づくり>を心がけ、【初任や加配の障害に関する専門性を向上させていく】ことを行っていた。これらが【保育者同士の信頼関係】や【保護者とのよりよい関係づくり】につながっていくと捉えられているのではないかと考えられた。こうした関係づくりを行うことで【園の保育者が主体的に支援を考えられる体制】が整い、保育者一人ひとりの障害児支援に対する力量を高めていく体制として機能することができると捉えられているのではないかと考えられた。

園内体制づくりの工夫について、19 のオープンコードとそれらの組み合わせからなる 7 の概念が抽出された(表 3)。工夫に関して、園長が主体となって、話し合いの提案や保育者、保護者の悩みを聞く等、園内の体制づくりを工夫している姿や障害児支援についてより理解が深められるよう

表2 園内体制に対する考えに関する概念とオープンコード

概念	オープンコード
保育の省察	<ul style="list-style-type: none"> 自分の保育を振り返る 保育者同士で保育を振り返る、学び合う
子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの実態に気づく
園長の主体性	<ul style="list-style-type: none"> 自分からなるべくコミュニケーションをとる 担任の支援に対する助言や声掛け 当事者や周りの保育者から悩みを聞く 園の環境設定、加配の配置 保育を振り返る場の提案 クラスの子どもの姿を見る心がけ
話し合うことの難しさ	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に入っている保育者との話し合う時間がない 大規模の園での保育者同士の話し合いの難しさ 勤務時間の違いで全員揃う難しさ 保育者同士のチームワークの難しさ
障害に関する知識の少なさ	<ul style="list-style-type: none"> 障害に関する知識の少なさ 助言できる知識を持ちたい
保護者対応の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> 保護者への助言の難しさ 家族への対応の難しさ
自分の保育に対する不安	<ul style="list-style-type: none"> 保育内容の不安
保育者同士の信頼関係	<ul style="list-style-type: none"> 他の保育者との信頼関係 他の保育者の協力 職員のチームワーク 常に加配と話し合う
保護者とのよりよい関係づくり	<ul style="list-style-type: none"> 保護者を含めた話し合い よりよい関係づくり 子どもへの支援に対する保護者の理解
園全体に対する配慮・工夫	<ul style="list-style-type: none"> 保育者が話しやすい雰囲気づくり 常に笑顔でいる気持ち 話し合いの工夫、話し合う時間をつくる
保育者が主体的に支援を考えられる体制	<ul style="list-style-type: none"> 常に保育者同士で支援等について言いあえる体制 園の保育者が主体となって保育を考える 園の保育者たちが考えて支援を工夫する
初任や加配の障害に関する専門性を向上させていく	<ul style="list-style-type: none"> 初任や加配の気になる子どもに関する気づき 研修を通しての初任の学び
障害に関する知識の充実	<ul style="list-style-type: none"> 日々障害について勉強する 障害に関する知識を保育者はみな得ている

に保育を振り返る場の設定や振り返る場の効率的な運営に関する配慮等を行っていた。

IV 総合考察

障害児支援に関する園内体制づくりのあり方について、以下の二点が考えられた。

第一に、障害児支援に対して不安や困難を感じながらも、保育者自身が主体的に子ども理解に努め、情報収集しながら常に支援の振り返りや改善を行っている。園長や主任、経験年数の長い保育者が、いかに経験年数の短い保育者の支援に対する不安・困難を低減させていくかを検討することが重要である。

第二に、園長は「常に先生同士で支援等について言いあえる体制」等の【園の先生が主体的に支援を考えられる体制】を、園内体制づくりにおいて重要な視点であると捉えていた。

以上のことから、障害児支援に関する園内体制づくりを考える上で園長が主体となって、園内体

表3 園内体制づくりの工夫に関する概念とオープンコード

概念	オープンコード
園長が主となり、提案・投げかける	<ul style="list-style-type: none"> 保育者同士での話し合いの提案をする 話し合いの時間をつくる 園長から全体に提案や投げかけをする
保育を振り返る場での配慮	<ul style="list-style-type: none"> 付箋を用いた工夫した話し合い 保育を振り返る場づくり 園長も一緒に考える 保育者同士で保育について話し合う
話し合う時の効率的な運営	<ul style="list-style-type: none"> 話し合う時間や場所、テーマ、司会を決めておく 話し合う内容について相談したりして決めておく 言いやすい雰囲気づくり
人の保育からの学び	<ul style="list-style-type: none"> 人の保育を見て学ぶことの大切さ
自分の実践からの学び	<ul style="list-style-type: none"> 自分の実践の積み重ね
悩みを聞く	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの保育者の声を引きだし、悩みを聞く 相談しやすい保育者に相談する 保護者の悩みを聞く
見通しをもった保育を行うために活用する	<ul style="list-style-type: none"> 保育計画を立てる 見通しを持った保育を考える 子どもの情報が入ったファイリングの活用 経過記録をつける

制づくりの工夫や障害児支援についてより理解が深められるような配慮等を行い、【園の先生が主体的に支援を考えられる体制】をつくっていくことが重要であろう。それとともに、経験年数の長い保育者が、経験年数の短い保育者の不安・困難を低減させ、経験年数の短い保育者に対する障害児支援の力量を高めていく取り組みについて検討していくことが重要であると考えられる。

文献

厚生労働省(2008) 保育所保育指針 保育所保育指針厚生労働省 2009年4月6日, <<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf>> (2016年1月11日)

丸山美和子(2000) 障害児の「特別なニーズ」に対するケアと統合保育—統合保育の成果と障害児保育の今後の課題—. 佛教大学社会学部論集, 33, 109-124.

文部科学省(2008a) 幼稚園教育要領

文部科学省(2008b) 幼稚園教育要領解説 幼稚園教育要領解説 文部科学省 2008年7月, <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf> (2016年1月11日)

文部科学省(2015) 平成26年度特別支援教育に関する調査の結果について 平成26年度特別支援教育に関する調査の結果について 文部科学省 2015年3月27日, <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1356203.htm> (2016年1月11日)

小塩真司(2004) SPSS と Amos による心理・調査データ解析 [第2版]. 東京図書

佐久間庸子・田部絢子・高橋智(2011) 幼稚園における特別支援教育の現状: 全国公立幼稚園調査からみた特別な配慮を要する幼児の実態と支援の課題. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 62(2), 153-173.

佐藤暁・岩切靖浩(1989) 幼稚園における障害児保育に対する保育者の態度. 鹿児島経済大学社会学部論集, 8(2), 1-16.

佐藤郁哉(2008) 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社.

高田純・中岡千幸・黄正国(2011) 小学校教師の特別支援教育負担意識とメンタルヘルス要因. 広島大学心理学研究, 11, 241-248.

吉川はる奈・尾崎啓子・細川富夫(2008) 幼稚園教諭を対象とした保育現場における軽度発達障害の意識調査に関する研究. 埼玉大学紀要教育学部, 57(1), 159-165.

全国保育協議会(2012) 全国の保育所実態調査報告書 2011 各種調査 2012年9月, <<http://www.zenhokyo.gr.jp/cyousa/201209.pdf>> (2016年1月11日)